

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

# 放射線影響評価の国際機関（UNSCEAR）の歴史と現在 東電福島原発事故の健康影響をめぐる日本の論争を理解するために

著者	柿原 泰，藤岡 毅，高橋 博子，吉田 由布子，山内 知也，瀬川 嘉之
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日本科学史学会第65回年会・シンポジウム S4「放射線影響評価の国際機関（UNSCEAR）の歴史と現在 東電福島原発事故の健康影響をめぐる日本の論争を理解するために」 開催地：東京理科大学葛飾キャンパス（東京） 開催日：2018年5月27日 13:10-15:40
科学研究費研究課題	放射線影響研究と防護基準策定に関する科学史的研究 = History of Radiation Effects Research and Protection Standards
研究課題番号	16H03092
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00001560/">http://id.nii.ac.jp/1342/00001560/</a>

## 放射線影響評価の国際機関（UNSCEAR）の歴史と現在 ―東電福島原発事故の健康影響をめぐる日本の論争を理解するために―

日時 2018年5月27日（日）午後1時10分～3時40分

場所 東京理科大学葛飾キャンパス 講義棟5階 A会場

JR常磐線（東京メトロ千代田線）「金町駅」／京成金町線「京成金町駅」下車、徒歩8分

日本の法令は一般公衆の線量限度を年1 mSvとしてきたが、原発事故後、政府はICRP2007年勧告に依拠し緊急時の対応として住民に年20 mSv（毎時3.8  $\mu$  Sv）の被曝を容認する決定をした。その決定を多数の市民や専門家が批判したが、首相官邸が任命した原子力災害専門家グループの専門家たちは100 mSv以下安全論を展開した。政府・専門家は、自分たちの見解は原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）に依拠するもので、したがってそれは「国際合意」の「科学的知見」であると主張している。

しかし、UNSCEARに対して「被ばく線量を小さく見積もっている」「健康被害を過小評価している」という批判が世界中の科学者から出されている。それにも関わらず、事故から7年以上経過した現在、年20mSv基準に基づく避難指示解除に伴って避難者への支援は次々と打ち切られた。チェルノブイリでは事故5年後に5 mSvを超える地区は移住の義務ゾーンとなり、1～5 mSvの地区は移住の権利ゾーンとして国家による様々な補償（移住のための経費や仕事の斡旋など）が与えられたのとは対照的である。日本政府がいかに「安心」「安全」を強調し早期帰還を促そうとも避難者の大半は帰還しておらず、政府の放射線安全論に対する住民の不信は拭いがたい。

本シンポジウムでは、政府が進める早期帰還政策の科学的拠り所であるUNSCEARに焦点を当て、その報告が「国際合意」の「科学的知見」と言えるかどうか歴史的経緯を押さえつつ吟味し議論する。さらに東電福島原発事故後の小児甲状腺がん多発の原因をめぐる現在の論争の本質にも迫りたい。科学史学会会員はもとより放射線影響問題に関心を持つ非会員の方々の積極的な参加を呼びかける。

### <プログラム>

・趣旨説明と問題提起                      コーディネーター    藤岡毅（同志社大／大阪経済法科大）

講演1    高橋博子（名古屋大学大学院法科学研究科）

「アメリカ原子力委員会とUNSCEARの発足：1950年代を中心に」

講演2    吉田由布子（「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク）

「チェルノブイリ後の小児甲状腺がん多発問題とUNSCEAR」

講演3    山内知也（神戸大学大学院海事科学研究科）

「小児甲状腺がんの多発とUNSCEAR2016白書の非科学的性格」

・コメント

コメンテーター    瀬川嘉之（高木学校）

・全体討論

司会

柿原泰（東京海洋大学）

シンポジウム当日のプレゼンテーション資料を東京海洋大学学術機関リポジトリ TUMSAT-OACIS に掲載する。

各講演要旨については、『日本科学史学会 第 65 回年会 研究発表講演要旨集』（2018 年 5 月）に掲載されている。また、本シンポジウムの内容に関する報告は、後日、日本科学史学会『科学史研究』誌に掲載される予定である。あわせてご参照ください。

（柿原 泰）